

馬路村↓高知市 土佐塾・湯浅愛梨さん(1年)

これからの  
一歩  
高校野球100年  
3

硬式野球部のマネジャーができて、寮があって、制服もかわいい――。

湯浅愛梨さん(1年)は念願がかなって、4月、土佐塾のマネジャーになった。グラウンドでは休む間もなく動きまわる。ノックのボールを拾ったり、白線を引いたりしつつ、お茶を出し、走塁のタイムも測る。

ボールを横目で追いつつ、選手が打球を巧みにさばくとすかさず声が出る。

「ナイキャッチー」  
湯浅さんは「中学の時の癖が抜けない」と笑う。

中学3年の夏まで選手だった。魚梁瀬中(馬路村)の野球部で、部員は湯浅さん1人。試合では安芸市や室戸市の中学校と連合チームを組み、主将も務めた。

湯浅さんは小学5年の終わりに地元の野球チーム「馬路スポーツ少年団」に入った。11人いた選手のうち2人が転校。試合に出場するには1人足りなくなったところだった。座っているだけでいいと

# 選手からマネジャーに

湯浅さんの場合



言われ、ルールも知らぬまま、しどろしどベンチに入った。

いざ試合に行くと別世界が広がっていた。車で30分ほどかかる隣の小学校の女子選手とお弁当を食べたり、監督やコーチとおしゃべりしたり。当時の魚梁瀬地区の住民は約200人、同級生はわずか

## 積極性培い「頼もしい存在」

か4人。「試合でたくさんのお会いがあった、思わず『野球やる』と言っちゃったんです」

驚いたのは両親だった。人見知りもあり、友だちの家に行くのも尻込みしてしまうような性格。「どこまで本気なんだろう」

飛球が顔に当たったり、肉離れになったりすることもあった。それでも、チームメイトに追いつこうと毎日のように自主練習に励み、練習では誰よりも大きな声を出した。

監督で馬路村の村長でもある上治堂司さん(60)は「練習する上治堂司さん(60)は」練習

に取り組み姿勢がひたむきで、とにかくいろんなことに気がつく子だった」と振り返る。

引込み思案の性格が少しずつ変わっていった。

「高校ではマネジャーを目指そう」  
男子選手との体力差も感じていたし、ショートヘアだった髪も女の子らしく伸ばしたかった。同じ中学で野球をやっていた弟の大雅君(14)の練習試合に足を運び、父の雅喜さん(41)にスコアの書き方を教わった。

土佐塾に入ってから、「特別」は役に立った。スコアラ1で、マネジャーでもある先輩の川上夏子さん(3年)は

「入部直後からスコアを書けたので、頼もしい存在でした」。白壁大輔監督は「野球を知っているのだから、練習内容を見ながら先回りして動く。積極性があったて動きが速い」と話す。

湯浅さんは今、マネジャーとして選手を支え、甲子園を目指している。高校を卒業したら、大学で地域活性化について学び、馬路村の職員になるとうと考えている。

湯浅さんが野球を始めた馬路スポーツ少年団は1昨年、メンバーが足りずに活動を休止した。村の人口は949人。野球ができる環境が村からなくなるのはさびしい。

「馬路村の人たちは温かい。大好きな村なので、なくなってしまうのは嫌いです」  
(西村奈緒美)



①練習でボールを集める土佐塾の湯浅愛梨さん。高知市北中山にある土佐塾のグラウンド  
②中学3年の時に使っていたスコアブックを懐かしそうに見つめる土佐塾の湯浅愛梨さん

